

住宅地って、どんな空間だろうか。平日の昼間に、働き盛りの男性が私服でフラついたら怪しまれ、あるいは子供のいる女性が「〇〇ちゃんのお母さん」というアイデンティティに縛り付けられる領域である。それは、壁に囲われた家の中のプライバシーを「自由」と履き違え続けてきた、私たちが暮らす場所である。

本当の自由は何かを問うことが、住宅や住宅地のこれからの可能性を考える第一歩だ。自由とは能動的な状態である。環境に対して能動的になるためには、他者との出会いが重要だろう。「〇〇ちゃんのお母さん」が、近所の人とゆっくりと、何気ない会話をする中で、菓子職人を目指していた若い頃のことを語り、そんなの知らなかった！だったら、！と話が盛り上がって、住宅地の人々を呼んで小さなお菓子教室を開くことになる。そのとき、「〇〇ちゃんのお母さん」は自分自身の個性や力を通じて、環境に能動的に関わることになり、また新しい出会いを生む場を自らつくる。これこそが、本当の自由である。

この能動性のトリガーとして、他者との何気ない会話は不可欠である。そういう出来事が起きる空間、つまり「他者と出会い、共にいられる空間」が、重要ではないだろうか。

そういった場所は、住宅地の中にただカフェを作れば、とか、境界を取り払ってオープンにする、ということだけでは実現できない。誰しもがオープンマインドに他者と話せるわけではない。知らない人と話すことに臆病で、気まずさを感じる私たちの身体があり、そのささやきに耳を傾ける必要がある。どこかに強い焦点があたるよりも、散漫で揺れ動く弱い重心がたくさんあると、居心地が良い。大きな理由がなくてもそこにいることが許される感覚を、どうつくることができるかが、建築家の腕の見せ所だろう。

住宅地は、建築や庭や道が親密なスケールで連続していることに価値がある。そこにどのような新しい奥行きを生めるかを考えたい。